

自衛艦隊司令官講話等シリーズ（その5）

【自衛艦隊司令部職員に対する示達（3／3）】（15. 3. 28）

Ⅲ「海上自衛隊」について

冷戦中軍事組織は自己の役割を議会や国民に説明する必要もなかった。その単純明快な役割を議会も国民も十分に理解していたからである。

しかし、強大なソ連の崩壊による冷戦終結後、軍事組織は複雑怪奇な国際情勢のなかで、ライフサイクルコストが安くて、平時にも効用のある軍事力を展示・鼓吹して如何にお役に立てるかについて自分自身を議会や国民に説明する必要に迫られている。よって海上自衛隊も戦時だけではなく、平時から危機時にも低コスト・高効率で如何にお役に立つかについて議会に、そして国民に対し、自らの存在価値と機能価値を証明し続けなければならない。それは海上自衛隊にとって第3次世界大戦以上に困難な道であろう。

したがって、オピニオンリーダーやマスコミ等に対し、より積極的な広報の推進が重要となる。そこで、組織としての海上自衛隊の健全性だけでなく、個人としての海上自衛隊員の健全性も注目されることになる。つまり、自衛隊員としての威信失墜行為、故意事案（飲酒運転、無免許運転、所在不明、暴行傷害、窃盗、破廉恥行為など）及び特殊事案（薬物使用、秘密漏洩など）などの規律違反も世間の厳しい目に晒されるのである。力有る者は、自己制御ができるはずである。力有る者「精強・自衛艦隊」の諸官こそ、冷戦後の海上自衛隊の道を歩む模範となってくれる事を信じている。

1 組織

自衛隊は行動（戦闘）を生命として国家に献身する組織である。

すなわち、企画する組織ではなく、行動（戦闘）が全ての組織であって、全てのことは第一線の自衛官のみならず事務官等の隊員一人一人の行動（戦闘）によって完結するのである。しかるが故に我々が事を為すに当たっては、単に思索・検討のみに止まることはあり得ず、決断と実行及びその結果についての責任が当然求められる。

海上自衛隊の隊員は、自衛官・事務官・技官等から構成されている。その自衛官と事務官等との根源的相違は何か？それは即ち自衛官は戦闘員であり、事務官等は非戦闘員であることである。戦闘員である自衛官は、あくまで“百般のこと、戦闘を以て基準とすべし”と銘記して諸業務もオペレーションと捉えなければならない。軍事的センスでもって諸業務も実施しなければ制服を着ている意味がない。また、戦時国際法によると、戦闘員が武力を行使し、結果として敵の戦闘員が死傷しても合法であるが、非戦闘員が正当防衛等を除き武力を行使すると違法である。それならば「海上自衛隊員を全て自衛官としたほうが、戦闘する上で効率的ではないのか？」と考える者もいるかもしれないが、そうではない。事務官等は、戦闘員ではないけれど、専門職として国防の大事を担っている存在であり、その上自衛官とは異なる視点を有するが

故に価値がある。複眼的思考のできる組織は残存性の高いことが古今東西を通して証明されている。念のために付言すると、自衛官の視点と事務官等の視点とが戦闘員と非戦闘員との相違のため異なっているが、自衛官も事務官等もNAVYという共通の基盤の上で価値観を共有する海上自衛隊一家の構成員であることは勿論である。

2 編成

海上自衛隊の運用する艦艇・航空機の規模から列国海軍並の兵員を見積もると少なくとも7万人は必要であろうと言われているが、後方要員の不足を正面要員で補填するという超合理的発想によって約5万人の隊員が一人数役でなんとか任務を遂行してきた。海上自衛隊も我が国の経済状況・国家財政と無縁でないので、今後とも“人・物・金”に厳しい制約が続き、一人数役の精神は常態化するであろう。そこで、我が自衛艦隊諸官のご苦勞も、申し訳ないけど、まだまだ続くことになる。

3 即応柔軟態勢

自衛艦隊司令部を含めた部隊の業務も、長期計画、中期計画、短期計画、通常業務及び突発対応に区分できる。特に重要なのは、突発的な事案・事故・事態に効果的に対応できることである。これまで海上自衛隊の鼎（かなえ）の軽重を問われかねない事故が生起しても、諸官の働きによって、良い印象で報道され、良い方向に収束してきた。今後ともこの真摯な努力を継続してもらいたい。その一つが、指揮官が指揮所に四六時中いなくても的確な初動措置ができる指揮官代行を養成しておくことである。

4 幕僚業務要諦

幕僚は、情勢及び行動方針を見積もり、彼我行動方針を分析し、我が行動方針を比較し、指揮官が判断し決断できるように資料（情報）を提供する。

ASUW（対水上戦）を例にとって説明する。

- ① 各種情報を分析して「敵が射程内に入った。」と見積もった。
- ② 各種状況を組み合わせ「今こそ攻撃すべし」と判断した。
- ③ 情勢判断とROEから「攻撃命令を発令せよ」と決断した。

①は幕僚の仕事であり、③は指揮官の仕事である。ここまでは諸官承知のとおりである。十分に認識してもらいたいのは、②が指揮官だけの仕事でなく、②が幕僚の仕事であり指揮官の仕事でもあることである。幕僚の判断としての②が提供されて、初めて指揮官は自分なりに②の判断ができるのである。幕僚は、この②レベルを提供できてこそ、指揮官の決断に寄与したことになる。

5 要務処理

「要務処理が悪い！」と叱られた覚えは誰にでもあることであろう。この要務処理とは“日常の要務処理”のことであるが、基本は“作戦の要務処置”なのである。よって『海上自衛隊作戦要務準則』等をよく勉強して、社会科学の一分野である問題解決法の応用たる軍事問題解決法の手順を日常業務に応用すればよい。